

や川が結氷するにつれて、次々にまだ結氷しない南の水域へと集団をなして移動するのであって、数千キロの長途を一気に越冬適地に渡来してくるのではない。わが国の白鳥飛来地は、今は限られてしまったが、昔は東北・新潟以北全域の川という川、沼という沼に、今とは比較にならぬ数の白鳥が渡来して越冬した。厳しい冬の訪れと共に、きまって姿を現わす白鳥の他の鳥々にはない清純で神秘で高貴な美しさに魅了された人々は、そこに神を見たのであった。日本古来の神観念は靈魂即神である。靈魂が神たる白鳥になるという信仰の発生は、如何に悠遠の原始時代であったろうか。日本武尊が東征の帰途に病歿し、その魂が白鳥となったという有名な神話伝説もその一つである。白鳥そのものを愛護する慣行は当然のことで、白鳥神社や白鳥伝説が、水のほとりに今なお数多く残っているのは、白鳥信仰の純粹強烈であったことを物語るものである。現在宮城県内で白鳥が最も多く渡来するのは、伊豆沼および内沼とその周辺（築館・若柳・迫の3町にわたる）であって、昭和40年12月1日天然記念物の仮指定42年9月7日日本指定がなされた。

- 資料 仙台市史第6巻
宮城県史第20巻
栗原郡誌（栗原郡教育会編）
登米郡誌上巻（登米郡役所編）
柴田郡誌（柴田郡教育会編）
三本木町誌下巻（三本木町誌編纂委員会編）
仙台方言考（真山青果）
真山青果全集第15巻
真山青果全集（新版）第17巻
全国方言辞典（東条 操編）

102 「アメリカ及甚」とはどんな人物か

問 「アメリカ及甚」とはどんな人物ですか。

答 「アメリカ及甚」とは、明治中期に密航によってカナダ移住に成功した及川甚三郎のことで、当時海外事情に疎くカナダとアメリカとを区別できなかった人々が、彼を「カナダ及甚」ではなく「アメリカ及甚」と呼ぶようになったのです。

彼は、安政2年11月26日、登米郡米川村字鱒淵の農家小野寺重郎治の3男として生まれました。
(1)

14才の時、親戚の須藤弥重吉に預けられ、木炭・大豆等を石巻に移出する川蒸気で北上川を上下しました。世は明治の新しい時代に入っています。明治7年、20才になった彼は同村及川栄蔵の養子として迎えられ、製糸業を継ぎ、生来の事業家的手腕を発揮し始めました。そして生糸取引のため横浜に出かける機会が重なるにつれて、外国船の雄姿に魅せられた彼は海外への夢を大きく募らせることとなります。そうして彼の海外雄飛の決意を決定的なものとしたのが、年来情熱を傾けてきた中田沼干拓計画が、世人の無理解な反撃を受けた時でした。そこで彼は県に海外移住許可を申請したのですが、成業の見込なしということで受理されません。正規渡航の道を断たれた彼は、遂に単身密航を企てること3回、その都度発見され強制送還されたが、またしても敢行した4回目が成功し、上陸後あてもなく潜行して辿りついたのがカナダバンクーバーのスティブスタンの町だったのです。明治29年のことで、彼は42才になっていました。

ここでイギリス人に受入れてもらうことができた彼は、人一倍勤勉な仕事振りを忽ち認められるのでした。このようにして雇主の信頼を勝ち得た彼は、数年後にはその英人が所有するフレーザー川の中にあるライオン島という約6万平方メートルの小島を借り受け、自力で開墾することができるようになりました。

この付近は、きわめて豊富な鮭漁場でもあることに着目した彼は、第二の米川村建設を計画したのであります。しかし移民は制限されており、多くの移住者を呼び寄せることは不可能だったので、計画実現のために彼がとらねばならなかった方法は、結局密航による以外にはなかったのです。

明治39年の春、一旦帰国した52才の及川甚三郎は、カナダ移住者を勧誘し83人の同志を集めました。参加者は米川村とその隣村の中流農家の20-30才台の中堅層が大半で、1人当りの参加費用100円〔当時の米価60kg（比較上現在の1俵の重量をとった）で6円〕は、それぞれ山林や田畑を処分し、或いは抵当にして調達して持ち寄ったといえます。

彼は直ちに資金の半額をふところにして横浜に赴き、一隻のボンコツ船を買い取り、船員を雇い上げて、牡鹿半島まで曳航し、桃生郡荻の浜で改装修理をしました。4本マスト196トンの帆船で、船名は水安丸。1か月ほどで整備を終ったので、試験航海を兼ねて横浜まで航行し一行の衣料等を購入して帰り、更に石巻で食料品を積み込み、準備万端が完了しました。

愈々明治39年9月10日の深夜、支倉常長が船出したと伝えられる荻の浜の月の浦から密航の出帆をしたのです。乗船者は、三重県出身の船長と関西人の船員4名、それに渡航者83人。水安丸は帆船であるため風まかせの航海で、羅針盤をたよりに金華山・千島・アリューシャン・アラスカ・カナダのコースをとり、食糧や水不足とたたかひながら、約40日かかってフレーザー河口のバンクーバーに辿り着くことができたのでした。当時太平洋航路の所要日数は18日から20日だったということです。

83人という大量密航者達は翌朝全員上陸し、50軒先の目的地ライオン島に向かって徒歩で出発しました。密航は完全に成功したかと安堵したのも束の間、一行は密航者として逮捕されてしまい

ました。ここで本国送還ともなりかねなかったのですが、甚三郎が万一に備えて入手した海員手帳を全員が所持していたことと、当時のバンクーバー駐在の領事館員吉江三郎や日本人牧師の奔走とによって上陸が許可されました。エクスモールの要塞地帯に上陸したことに対する罰金だけで済んだということです。

こうして83人の移住者は、附近の農場や鉄道工事などに就労し、漁期には無尽蔵な鮭漁に励み、カナダ移民として定着して行くこととなります。その後も甚三郎は巧みに密航団をこの地に移入すること数回に及び、やがてフレーザー河周辺は、甚三郎が構想した通りの第二米川村の景観を呈するに至りました。

やがてライオン島も、及川甚三郎の所有となり及甚島と呼ばれるようになりました。甚三郎は持前の企業手腕を縦横に発揮して巨富を築き、横浜に英米物産商會を創立したり、北洋漁業株式会社を起して遠洋漁業に進出するなど、盛んに事業を拡張し、いずれも盛業をきわめました。やがて老境に入った甚三郎は、大正年代に帰国し、横浜に居を構えましたが、晩年には桃生郡佳景山〔かけやま〕⁽⁴⁾に隠棲し、昭和2年4月3日ここでスケール広大な73才の生涯を終りました。町村合併で東和町となった故郷米川鱒淵の来光寺に葬られました。型破りに豪放な開拓者「アメリカ及甚」の名は、彼を知る内外の人々によって一段と讃えられたのでした。なお、彼の率いた密航者達は、カナダの大地に美事に定着しました。その後第二次大戦の難局を踏み越えた一世の生存者を始め、二世・三世の活躍の現況が伝えられています。甚三郎の達成した事業の真の偉大さは、緑濃い大森林の間を真青に美しく流れるフレーザーの大河のほとりに、不朽に生き続けているのだといえます。

注(1) 明治22年町村制施行時に狼河原〔おいのかわら〕・鱒淵の2か村を合併して米川村と称した。昭和31年9月30日錦織村と合併して日高村となったが、昭和32年5月1日更に日高村は米谷町と合併して東和町となった。

注(2) 石巻市の牡鹿半島部の荻浜と桃浦の中間にあり、石巻湾に面し小鯛島が風波を防ぐ位置にあるので舟の発着に適しているため、慶長18年〔1613〕9月15日、支倉常長の遣欧使節船サン・ファン・バプチスタ号も此処から出帆した。

注(3) 「登米郡米川村誌」(米川村)に『之〔鮭〕を塩蔵として東洋に出荷することを計画した。塩鮭や筋子が東洋市場に米国〔?〕から出荷されたのが甚三郎氏をもって嚆矢とするものであり、特筆さるべき事業である。カナダ産業沿革史にもこの事業が明記されている次第であって、内地否本村に於てもすでに忘却されている事である。』とある。

注(4) 桃生郡河南町にある。国鉄女川線の前谷地と鹿股両駅の間はこの駅名がある。欠山丘陵が北上川の流れに迫って断崖となっている。ここを欠山〔かけやま〕といった。林子平と親交のあった塩釜神社の神官藤塚知明〔寛政11年〔1799〕63才で歿〕が、鹿股字梅木に幽居していた時、欠山を佳景山と書いたもので、それ以来このように表記するようになったと伝えられる。このあたりの風景は文字通り雄大佳景である。

資料 登米郡米川村誌（米川村役場）

仙台人名大辞書（菊田定郷）

海外移住に牽かれた人々（宮城県海外協会編）

宮城人（朝日新聞仙台支局編）

ふるさと再見（読売新聞東北総局編〔ただし記事中に永安丸とあるのは水安丸の誤り〕）

密航船水安丸（新田次郎）

〔「アメリカ及甚」を標出項目や書名とした図書資料がないので、これをそのまま探索語としてレファレンスワークを進めると解決が困難である。〕

103 旧仙台領と南部領との境塚

問 仙台領と南部領との境界に築かれた境塚が今も岩手県内に残存しており、その境界は、伊達政宗が本来の藩境よりもずっと南部側に入り込んで強引にきめたのだということですが、それはどこにあるのですか。

答 現在北上市に入っている旧鬼柳村と旧相去⁽¹⁾〔あいさり〕⁽²⁾の境を横切り、無数とっていい程の土塚の列が東西に蜿々と延びています。これが胆沢郡と和賀郡との境界線上に築かれたもので、即ち仙台領と南部領との藩境を画然と示すための境塚の列であります。明治以後に消滅してしまったものや、半壊状態となったものの中にはありますが、雑木の生えるにまかせた高さ1メートル半ほどの土塚が列をなして続いています。場所によってはこの境塚列に沿って植えられていた松並木も残存しており、今なおこのように完全な姿の境塚の列が、これ程長距離にわたって残されているのは、わが国では他の何処にも見ることができないものとなっています。この境塚の列は、寛永19年〔1642〕仙台・南部両藩の全面的な藩界協定の結果、先ず68個の大塚の列が築造され、その後享保6年〔1721〕にこの境界を更に明確にする必要上、既設の大塚の間に多数の小塚の列を築いたものであります。小塚の数については、元禄10年書写の「仙台南部領境書留覚」に189と記されています。藩境塚は、当時「御境塚」「御塚」「境塚」「御境目塚」または単に「塚」などと多様に呼ばれていました。そして境塚の補修保全についても厳重な取りきめがなされており、山中にある塚は3年目毎に、里にある塚は5年目毎に上置（崩れかかった塚に土を置いて復旧すること）、刈払いをして補修するというルールが、明治初年に至るまで実行されてきました。

この境界即ち和賀・胆沢両郡の郡界は、分水嶺または河川のような明確な自然地形・地物によって設定されたものではなく、全く人為的なものでした。これは歴史的に北上平野に於ける征夷開拓